

本連盟のあゆみ

1. 学生陸上競技の誕生

学生陸上競技の誕生は、札幌農学校へ招聘されたアメリカ人教師ウィリアム・スミス・クラークが1876年（明治19年）に、助手のウィリアム・ホイラーとダベット・ペンハローに命じて学生に陸上競技を伝授し、1878年（明治21年）5月に札幌において第1回競技会を開催したことに始まったとされる。当初の陸上競技会は、校内運動会であったが、やがてその延長として、対外競技として対校戦が始まる。1907年（明治40年）になると、一高、帝大、高師をはじめ、学習院、慶應、早稲田、明治等が集まって競技会を開催する。この1907年をもって学連としての陸上競技の開始の年とされている。

本連盟のあゆみ

2. 大日本体育協会の誕生と学連の創設

日本体育協会は明治 44 年 7 月、大日本体育協会（初代会長・嘉納治五郎）として設立、その最初の事業として同年 12 月、第 5 回オリンピック大会（ストックホルム）の派遣選手予選会を開き、翌年の同大会に嘉納団長以下 4 人の選手団を初参加させた。以後体協はオリンピックや極東選手権など国際大会への選手派遣や、陸上、水泳、バレーボールなどの日本選手権大会を創始し主催した。この種の大会への出場者は大半以上を学生競技者がしめていた。そこでは必然的に母校の肩書きをもって参加することから、学生が一堂に会する大学・専門学校の対校競技大会の開催にむけた気運が高まってきた。さらに、大学・専門学校へ進学してくる中学生を対象とした中等学校競技会の開催の必要性も出てきた。そこで体協とは別の独立した学生陸上競技会の統一組織体設立に結びついた。1919 年（大正 8 年）1 月関東地区の 8 つの大学の代表が、東京大塚の高師に参集し、「全国学生陸上競技連合」を設立し、4 月 19 日、20 日の両日に東京駒場運動場で第一回全国大学専門学校連合競技会を開催した。

一方関西地区では 1921 年（大正 10 年）10 月に、東京のみでなく関西の大学専門学校の対校競技会の場として、仮称「大学専門学校陸上競技連盟」を設立し、12 月 2 日、3 日に連盟主催のもと、第 1 回関西学生陸上競技運動会を鳴尾運動場で開催した。東京の全国学生陸上競技連合は、関西との合併を申し出るが、関西側は時期尚早として断り、2 つの学連が存在することとなった。

本連盟のあゆみ

3. 日本陸連の誕生と日本学連の誕生

1923年（大正12年）、翌年に行われるパリの第8回オリンピック大会の代表選考に際し、全国学生陸上競技連合は選手選考の公正等の3か条の提案を体協に要望していた。体協は、翌年4月14日予選会終了後すぐ選考会で、陸上競技8名を含む計19名の代表選手を選出した。しかし、選考過程において全国学生陸上競技連合の提案は受け入れられず、最終予選会の結果は無視されて選手および見学者が決定された。これに対し早、慶、明、農実の競走部が不満を表明し、続いて農大、法政、中央が同調して声明書をだした。これに日歯、立教、大倉高商、拓大、慈恵、日医が加わり、「陸上競技の代表選手選考が不公平である。そのような選考をする大日本体育協会の改組がなされないかぎり、体協主催の競技会に参加しない」と決めた。一方この運動に理解を示しつつも、方法論として意見の一致を見なかつた、東京帝大、東京高師、学習院、一高、浦和高、水戸高、青山学院とを合わせた、いわゆる「13校・7校問題」として有名である。この年、体協主催の全日本陸上競技選手権大会は流会となつた。この抵抗が契機となって、体協も組織改造に取り組むことになる。そして、1925年（大正14年）3月8日、全日本陸上競技連盟の創立をみ、競技団体の自立体制もしだいに整い、すでに全国組織をつくっていた水泳、スキーなど7競技連盟が加盟団体として体協を構成することになった。この改組で、各競技選手権大会の主催をはじめオリンピック派遣選手などの選考は、それぞれの加盟競技団体が行うことになる。

一方、東西の学連は学生の競技者の統括組織として、陸連の組織には加わらず、両学連は組織統一化へ向けて歩みはじめる。その結果両学連は、1928年（昭和3年）5月、東京において第一回日本学生陸上競技対校選手権大会を開催し、併せて組織の創立宣言を行うこと、全国中等学校陸上競技大会を新学連が継承して主催すること。北海道・東北・北陸・東海・中国・四国・九州・朝鮮・満州に学連組織を促し、加盟学連とすることを決めた。そして、5月26日、27日に明治神宮外苑競技場（現国立競技場）において、第一回日本ICを開催し、2日目11時50分より秩父宮殿下ご出席のもと、40校（関東27、関西12に広島高師）の代表が旗手として参加し発会式をおこなつた。この発会式では、日本学連創立宣言がなされ、秩父宮殿下から学連の進むべき道についてのお言葉があつた。

本連盟のあゆみ

4. 中四国学連の誕生

中国四国学連の誕生は関東・関西に比べ遅かったため、中国四国地区の大学・高校・専門学校は関西地区に所属していた。関西学連が 1921 年（大正 10 年）に誕生すると同時に六高が加盟し、翌年には山口高商が加盟、また 1923 年には、広島高師、松江高師が加盟している。近年発見された資料（昭和 11 年度日本学連年鑑、および、昭和 13 年度日本学連年鑑）によると、本連盟の日本学連への加盟は 1934 年（昭和 9 年）であることが確かめられた。しかしながら設立時の資料はなく、この 2 つの資料から推測すると、岡山医大と広島文理大が隔年で競技当番校として学連が運営されていたことがわかり、当番校は本部として IC（インターラッジ）を運営し、もう一方は支部として IM（インターミドル、現在のインターハイ地区予選に相当）を運営していたことが分かる。また、当時の会長・副会長も岡山医大・広島文理大の学長が交互に就任していることが分かる。この他に、規約が少なくとも 17 章 47 条まであることから組織としては、しっかりしたものであったことが推測される。連盟マークについては、昭和 11 年日本学連年鑑の表紙に現在と同じマークがのっており、また本文中の昭和 11 年 3 月 15 日臨時代表委員会議事録から「連盟マーク作成 作成に決定、5 月末日までに加盟校にて各図案を作成し本部に送付、総会席上にて採否決定」とあることからこの年に作成されたことが分かったが、誰が作成しその意図することは何かについては今もって謎である。

当時の加盟校は、1938 年（昭和 13 年）において、岡山医科大、広島文理大、山口高等商業学校、松山高等商業学校、広島高等工業学校、高松高等商業学校、鳥取高等農林学校の 7 校である。ここで疑問が生じる。先に関西学連に加盟していた学校の一部が参加していないことである。昭和 11 年の本連盟議事録には、3 月の代表委員会では「高等学校加盟問題 今しばらく時期の来るをまつこととし、なお、お互いに誠意ある努力をなす様に要望、広島文理大へ特に広島における情勢を一層詳細に調査あれ様希望ありたり、次回に持ち越す」（森本理事・岡山医大）とあり、6 月の会議では、「高等学校の加盟問題 広島文理大より種々説明あり、質問ありしも田村会長（岡山医大学長）の意見として連盟の権威のため卑屈なる態度を排し、今しばらく先方の歩み寄るを待ち、当分静観すること」とあることから、高等学校の加盟がうまくいなかつたことがうかがえる。なお、その後の推移については資料がないので分からぬ。今後の資料の発見に期待したい。

本連盟のあゆみ

5. 戦時中の陸上競技界

戦火きびしくなる昭和 17 年 4 月 7 日、スポーツの戦時体制化のため大日本体育協会は大日本体育会と改称（内閣総理大臣・東条英機が会長となる）し、加盟競技団体を解消し運動部会を組織（日本陸上競技連盟は陸上戦技部会となり包含される）、陸上競技の競技種目も戦力増強に役立つものに変更された。また、学生や生徒の体育同体に関する国家的な統制組織の確立をはかるため、各種目団体（日本学生陸上競技連合等）は解散し大日本学徒体育振興会（昭和 16 年 12 月 24 日発足）に合流させされることになる。以後この振興会は、第二次世界大戦が終結するまで、学生や生徒の体育運動に関する統制組織（文部大臣を長とする文部省の外郭団体）として中心的役割を果たすことになる。

本連盟では、1932 年（昭和 17 年）5 月 17 日に第 8 回中四国 IC を岡山医大で開催している。（昭和 13 年）に第 5 回大会が開かれていることから、14 年から 16 年の間に開催しなかった年がある。日本 IC は交通事情から昭和 16 年に中止されており、昭和 17 年の日本 IC が戦前最後の大会となっていることから、中四国 IC も昭和 16 年に中止されたのではないだろうか。また、昭和 18 年以降の体育運動は行軍、銃剣道、射撃等の戦技訓練と海洋、航空等の特技訓練に重点が置かれ、戦力強化に直接役立たぬスポーツは中止させられ、陸上運動も従来の競技種目は削除され、重量運搬、手留弾投、25 キロ団体継走などの種目が実施された。1945 年（昭和 20 年）8 月 6 日には、広島に原爆が投下され、爆心地から近い広島文理大学は壊滅的打撃をうけたことになった。

今日中四国学連の戦前の資料が皆無に等しいのは、この原爆の被害に一因があると思われる。

本連盟のあゆみ

6. 日本学連・日本陸連の復活

1945年（昭和20年）8月15日、悲惨を極めた戦争も日本の敗戦で終る。終戦直後の困乱を極める社会状勢の中で、かつての陸上競技愛好者達は、いち早く陸上競技の再建に立ち上った。昭和20年11月、東京で同好の士が集まり陸上競技再建準備会を作り、競技会の開催と陸上競技連盟の再建発足に奔走した。そして同年12月9日東大競技場において復活陸上競技会を開催、昭和21年5月日本陸上競技連盟再建へつながった。日本学生陸上競技連合は昭和22年7月19日再建の発会式を行った。そして、中四国学連が復興第1回対校選手権大会を昭和22年に開催したように、各地区学連とも再建への取組は早かった。

本連盟のあゆみ

7. 本連盟の復活

1946年10月、広島高師吉岡隆徳教授（故人）の後任として和歌山青年師範学校から川村毅氏（復活中四学連第4代会長）が赴任してくる。当時広島高師には、有働信幸教授（故人　復活中四学連初代会長）がいた。当時の学校は、戦災のため、乃美尾（賀茂郡）の元海軍衛生学校の施設を利用していた。当時の広島高師陸上競技部の学生には、国賓欣也氏、高取直人氏、雲木弘喬氏らを筆頭に、横田二郎氏、寺地亮二氏、長島敏、美濃地三郎氏といった新進気鋭の学生が相ついで入学してきた。施設・用器具など不十分な上に、食糧にもこと欠くほどの苦しい生活であったが、彼等の陸上競技にかける情熱は並大抵のものではなかった。この頃から有働信幸教授や広島工専岡田俊彦教授の許で、土生弘氏（広島工専一広島県議一故人）、長谷川鉢三氏（広島文理大一県教育長一故人）といった戦前からの先輩方や県体育課長吉岡隆徳氏から、戦後の虚脱状態から一刻も早く脱却し、青年に夢と希望を、学園の活性化をスローガンに、中四国ICの復活を呼びかけられた。これが引き金となって、当時広島文理大の学生であった三分一肇氏、横山英氏、長谷川孝士氏、西治夫氏をはじめ前述の高取、雲木両氏、さらに寺田茂、吉本勇両氏（広島工専）などの献身的な協力と熱意で、昭和21年末に、広島高校に中国四国地区の約20校の参加を得て、遂に1947年（昭和22年）6月、広島県営陸上競技場で、復活第1回中国四国学生陸上競技対校選手権大会（参加校13校、出場約80名）を開催することになった。

現在、本連盟では、この昭和22年をもって創立であるとしている。

本連盟のあゆみ

8. 本連盟の草創期

1949年（昭和24年）、第2回西日本学生陸上競技対校選手権大会を広島県県営陸上競技場で開催した。この大会では関西地区からは、伝統のある同志社大学、立命館大学、関西大学、関西学院大学といった強豪が集結し、中国四国学連はもとより、東海学連、九州学連など強烈な刺激を受けることになった。一方、広島高師の乃美尾から広島への復帰（元陸軍被服廠倉庫）が中国四国学連への連絡調整を容易にすることになった。広島高師の公認陸上競技場は、昭和16年、広島県営陸上競技場が設置されるまでは、広島高師の陸上競技場がこの地区唯一の公認陸上競技場であった。一周300mの完備したもので、広島県のみならず、中四国の陸上競技人に愛され、親しまれた思い出の多い競技場でもあった。競技場は、樟と柳の大樹に囲まれ、そこには併設された教官控室があり、かつて日本陸上競技界を代表する往年の杉浦卯三教授（故人）、有働信幸教授（故人）、吉岡隆徳教授（故人）といった錚錚たる先輩の足跡を残していた。広大陸上競技部OB会を（樟柳クラブ）と呼んでいるのは、この競技場に因んでのものである。当時の陸上競技部員といえば、何れの大学・高専にも共通した大会用の臨時部員が大半であった。

昭和23年になって、新制大学構想が具体化し、学生は旧制度か新制度か二者択一が当面の課題となり、課外活動も次第に精彩を欠いてきた。こんな折、広島文理大の前出の三分一、横山両氏の推薦で松本寿吉氏（現筑波大出身）が中国四国学連の幹事長となり、大会運営も軌道にのってきた。引き続き、前出の横田二郎氏という名幹事長が誕生し、彼の指導で美濃地三郎氏へさらに山下二三夫氏へと引き継がれていった。やがて昭和24年新制大学発足すると、森戸辰男氏（文部大臣－広大学長、第2代会長）を会長にいただき、また広大教育学部に体育科（元広島女高師母体）が誕生し、新しいスタッフとして陸上競技の菅沼昇教授（第3代会長）が、また教養部（現総合科学部）には、掘武夫（元副会長）次いで、高本友彦（第5代会長）両教官の着任があり、有働教授を中心に陸上競技の本格的な活動が始まり、本連盟の整備、充実に努力してきたのである。

本連盟のあゆみ

9. 初期の大会運営

なにしろ資金のない学生競技団体のこと、一つ大会を開催するにしても、経費的に運営面に、各般の問題があり、加盟校がそれぞれ主管大学となり、その学長を名誉会長ということで大学あげての協力のもと、大会も一日の日程で、小さい規模ではあるが、学生の大会とし運営してきた。また主管校は、協賛金や広告集め、参加科を補い、運営費を賄わなければならなかつた。そのため電話帳で企業や先輩をマークしての行き当たりばったりで、あるときは徒歩や自転車で、見通しが立つと電車やバスを利用したようである。

幸い大方のかたが、学生スポーツに温かい理解と激励をいただき、今日まできている。

本連盟のあゆみ

10. 本連盟の飛躍

昭和 33 年度より菅沼昇（広島大教授）を会長に迎え、中四国学連規約を整備改正（12 月 6 日）新たなスタートを切ることになる。この規約の第 2 条で「中四国における学生陸上競技の普及発達を図るとともに、学生競技者精神によって健全なる心身の養成に努めることを目的とする」と掲げ、その事業として、

- 1) 中国四国学生陸上競技対校選手権大会（中四国 IC）の開催
- 2) 中国四国学生陸上競技記録の認定
- 3) 中国四国学生駅伝競走大会の開催
- 4) その他第 2 条の目的に適う一切の事業としている。

（52 年 12 月改正で中国四国学生陸上競技選手権大会の開催を追加）

また、行事の一つとしての駅伝についても、代表委員総会の強い要望から開催にふみきり、しかも山口大学が自ら大会主管を要望され、山口市内の駅伝コース（6 区）において開催されることとなった。第 1 回大会は 6 大学の参加であったが、第 43 回大会には 18 大学 1 工専連合、26 チームの参加で熱戦を展開、立派な大会に成長した。当初この大会は、山口大学長、体育会、競技部 OB 等の役員構成で開催され、現在でも中国新聞の協力の下、小さいながらも、学生主体の運営がなされていることは、本連盟の誇りである。昭和 41 年には高知大学が本連盟に新加盟し、名実ともに、中国四国 9 県の大学の加盟を見ることができた。中四国学連への加盟校、登録・登記数をみると、

昭和 37 年度が 14 校・196（男 179、女 17）人、

昭和 42 年度が 23 校・369 人、

昭和 53 年度が 29 校・624（男 524、女 100）人、

昭和 61 年度が 39 校・957（男 775、女 182）人、

平成 9 年度には、54 校・1447 名（男子 1130 名、女子 317 名）を数えるまでになっている。

しかしながら、山陽、山陰、四国からなるこの地区の地理的悪条件、指導者、財源の不足、選手層の薄さ、また、加盟校の各競技部は、大体、新制大学ということで、伝統もなく、先輩とのつながりも薄く、経済的にめぐまれず、加えて同好のつどいということで、真の強い練習も実施されず、質的には大変低調な時代が長く続

本連盟のあゆみ

いた。競技力向上のため、東京オリンピック大会の前々年には学連強化対策協議会の名のもとに、加盟校学生代表 2 名の参集を求め、合宿しながらこれらの問題について討議すると共に、東京教育大学の金原勇教授の講演、指導をいただいたことである。そして質と共に部員数の量的面の拡充をはかり、部の確立を期したのである。また、選手の競技意欲の高揚、競技力向上ひいては学連全体のパワーアップを目指した方策の一つとして次のような表彰制度も設けて来た。

昭和 39 年より日本学生陸上競技対校選手権大会（日本 IC）6 位、西日本学生陸上競技対校選手権大会（西日本 IC）3 位までの入賞者に勲功章を授与することとした。また、昭和 26 年より副会長・会長として 20 年余にわたって情熱をもって学連をリードしてきた故菅沼昇氏の功績を記念し、中四国 IC 男子最優秀選手に菅沼賞（52 年度より）、菅沼の後を受け昭和 59 年まで会長を勤め、その発展に努力した川村毅氏の功績を記念し、同大会女子最優秀選手に川村賞（60 年度より）、また中四国学生新記録を樹立した選手（チーム）に新記録賞を授与している。さて、この弱少学連の中にあって堂々と日本 IC で優勝した選手は、

第 22 回（昭和 28 年）と第 23 回大会で岩本美智子（鈴ヶ峯大）80mH の 2 連勝、

第 45 回と第 47 回大会で綱島友恵（広島大）走幅跳 2 度優勝、

第 46 回大会で末田美歩（広島大）走幅跳、

第 52 回大会で伊藤まどか（高知大）400m、

第 53 回大会で伊藤まどか（高知大）200m、400m の 2 種目制覇である。

史上最大の規模となった「学生の祭典」、85 ユニバーシアード神戸大会へ、伊藤まどかが選ばれ 4×400mR のアンカーとして活躍した。この学連からのユニバ選手第 1 号である。

また、競技力のレベルアップを図るための事業として、昭和 49 年から平成 62 年まで中長距離強化合宿（広島・西条）を計 13 回、また昭和 58 年より平成 6 年まで選抜強化合宿（広島）を計 11 回実施している。